



※学-Viva：「Viva」は、「生きる」という動詞から生まれた言葉です。三重の「学び場」が生き生きするイメージで名付けました。

中学校英語の授業改善に向けて ～平成31年度（令和元年度）全国学力・学習状況調査の結果をもとに～

調査の結果

生徒が実際に英語を使用して、互いの考えや気持ちを伝え合うなどの言語活動が授業の中心になるようにしましょう。

観点別集計結果

	県平均	全国平均
外国語表現の能力	1.8	1.8
外国語理解の能力	43.7	44.7
言語文化についての知識・理解	65.2	64.7

※「話すこと」を除いた平均正答率(%)

学校質問紙集計（調査対象学年の生徒に対して）

	県平均	全国平均
まとまった内容を英語で発表する言語活動	23.4	27.6
自分の考えや気持ちを英語で書く言語活動	20.8	28.7
聞いたり読んだりしたことについて、生徒同士で英語で問答したり意見を述べあったりする言語活動	13.0	17.6
聞いたり読んだりしたことについて、その内容を英語で書いてまとめたり自分の考えを書いたりする言語活動	7.8	13.1

※よくしている(トップボックス)と回答した割合(%)

三重県の中学校英語の平均正答率は、全国と同値の56%となりました。調査結果からは、全国の傾向と同様、「生徒が自分の言葉で書いたり話したりする発信的な技能」に課題が見られます。

また、学校質問紙の結果からは、「まとまった内容を発表する」「自分の考えや気持ちを英語で書く」「聞いたり読んだりしたことについて、問答したり意見を述べあったり、書いてまとめたりする」言語活動を授業で行う学校の割合が低いことが分かりました。

調査問題は、学習指導要領で育成すべき資質・能力が具体的に示されたものです。調査問題から、知識・技能等を実際のコミュニケーションの場面で活用する力や、テーマに沿って自分の意見や考えを根拠に基づいて伝える力が求められていることが分かります。また「聞いて話す」「読んで書く」等、領域が統合された問題が出題されています。

授業改善のポイント

新学習指導要領では、言語活動を通してコミュニケーションを図る資質・能力を育成することが求められています。

新学習指導要領、調査問題、「授業アイデア例」をもとに、授業改善のポイントを5領域でまとめました。

聞くこと	(1) 明確な目的を持って聞かせる	話すこと (やり取り)	(1) 生徒が自分で考えながら話す機会を増やす
	(2) 授業は英語で行う		(2) 文部科学省の資料を活用する※下記掲載
	(3) 技能を統合した言語活動を行う	話すこと(発表)	(1) 生徒が即興で話す機会を計画的に設定する
読むこと	(1) 明確な目的を持って読ませる	書くこと	(1) 正確さは徐々に求めていく
	(2) 初見の英文を活用する		(2) まとまりやつながりを大切に
	(3) 技能を統合した言語活動を行う		(3) 口頭で伝える活動を行う

それぞれの詳しい内容は、「令和元年度全国学力・学習状況調査結果 分析報告書」をご覧ください。また、1月に各市町等教育委員会を通じて各中学校等に配付する「三重県中学校英語授業改善のポイント No.2」も参考にしてください。

来年度(令和2年度)は、中学校新学習指導要領に向けた移行期間の最終年度です。

※「中学校外国語科の移行期間における指導資料」(文科省作成)の活用を!

●中学校新入生の実態がわかる●

昨年度から始まった移行措置により、小学校での学習内容が増加するとともに、新入生の既習内容が年度ごとに異なります。そこで、その内容を把握するとともに、特に、入門期単元が生徒の実態に合うよう、指導資料にある小学校での学習内容をもとに「小中接続」を意図した単元を組みましょう。

●学ぶ内容がわかる●

新学習指導要領が全面実施される令和3年度の中学2・3年生が学ぶ内容は、前年度までの内容と比べ、語数や指導内容などが増加し、ギャップが大きくなります。そこで、令和3年度の学習に、より円滑に移行できるよう、指導資料を活用し、授業の冒頭5～10分で言語活動に継続的に取り組む「帯活動」を実施しましょう。

中学校外国語科の
移行期間における
指導資料

中学校英語教育推進一斉
研修(R1.7.1)にて、配付

人権感覚あふれる学校づくり ～一人ひとりの存在や思いが大切にされる環境を～

教育的に不利な環境のもとにある子どもをはじめ、すべての子どもの学力を育むには、一人ひとりの個性や教育的ニーズを把握し、学習意欲を高め、指導の充実を図っていくことが必要です。そのためには、学校・学級の中で、**一人ひとりの存在や思いが大切にされる環境**が成立していなければなりません。校内に人権尊重の理念に基づく教育活動を行き渡らせることは、学習活動を効果的に進める上で重要な観点の一つとなります。

三重県人権教育基本方針では、人権感覚あふれる学校づくりの取組の一つとして、次のように記述しています。

すべての学校において、教育的に不利な環境のもとにある子どもの学力を向上させることで、すべての子どもの学力・進路を保障する取組の充実を図り、子どもの将来が経済的・社会的な事情に左右されないよう学校づくり・環境づくりを進めます。



学校での取組例 ～2018(平成30)年度「人権教育研究推進事業」より～

平成30年度の「人権教育研究推進事業」で取り組まれた学校での実践の一部を紹介します。

① 子どもの生活背景の把握

忘れ物が多い、攻撃的な言動が多い等「気になる姿」を見せる子どもがいました。家庭訪問等を通して、子どもの生活実態を把握するとともに、教職員と保護者が子どもへの願いや悩み、期待等について対話を重ねました。それにより、個に応じた指導が行えるようになり、また、家庭との連携・協力が促進されました。

② 仲間づくり

総合的な学習の時間や生活科、特別活動で、日記や作文の交流を行い、互いのくらしや悩みを共感的に受け止め合うことで、誰もが自分らしく安心して過ごせる環境づくりを進めました。

③ 教育的に不利な環境のもとにある子どもを中心に

日常的に、教育的に不利な環境のもとにある子どもの生活や学習の状況を注視し、それをもとに、授業展開や指導方法を検討しました。そして、(教育的に不利な環境のもとにある子どもの)活動の様子をもとに取組の検証を行いました。

④ 11年間の人権教育カリキュラム

中学校卒業時のめざす子ども像を共通理解し、段階的に取組をつみ上げていけるよう同じ校区の幼稚園・小学校・中学校が連携し、11年間を見通した人権教育カリキュラムを作成しました。

⑤ 家庭・地域との連携

子どもの現状や課題、取組内容を保護者・地域住民と共有する場を持ちました。取組後には、学校と共に子どもたちを育てるという意識が高まり、登下校の見守りや学習ボランティア等への協力が増えました。

正規的教育課程だけでなく、子ども間・教職員間・子どもと教職員間の関係や、様々な場面での教職員の言動等が「隠れたカリキュラム」として子どもたちの人権感覚の育成に影響を与えることから、日常的に誰もが安心できる雰囲気づくりに努めることが大切です。



「隠れたカリキュラム」とは…

「隠れたカリキュラム」とは、教育する側が意図する、しないに関わらず、学校生活を営む中で、児童生徒自らが学びとっていく全ての事柄を指すものであり、学校・学級の「隠れたカリキュラム」を構成するのは、それらの場の在り方であり、雰囲気といったものである。例えば、「いじめ」を許さない態度を身に付けるためには、「いじめはよくない」という知的理解だけでは不十分である。実際に、「いじめ」を許さない雰囲気が浸透する学校・学級で生活することを通じて、児童生徒ははじめて「いじめ」を許さない人権感覚を身に付けることができるのである。だからこそ、教職員一体となつての組織づくり、場の雰囲気づくりが重要である。

「人権教育の指導方法等の在り方について〔第三次とりまとめ〕」より抜粋

◀取組の参考に▶ お問合せ：三重県教育委員会事務局 人権教育課 電話 059-224-2732

・人権教育ガイドライン <http://www.pref.mie.lg.jp/DOKYOC/HP/47755021153.htm>

・人権学習指導資料 「みらいをひらく(中学校)」、「みんなのひろば(小学校低中、高学年)」等

●学力向上通信「三重の学-Viva!!」の活用に関するアンケートへの回答のお願い●

県教育委員会では、学力向上に向け、最新の教育情報や先進的な事例を共有し、授業改善をはじめとした教育実践につなげていくことを目的として、この学力向上通信「三重の学-Viva!!」を発行しています。より活用度の高い通信の作成のための参考資料としたいと考えておりますので、以下のURLにあるアンケートにご協力ください。

<https://www.shinsei.pref.mie.lg.jp/uketsuke2/form.do?id=1573010348648>



子どもたちに読書の楽しさを届けよう！



近年、子どもたちを取りまく環境が大きく変化してきている中、子どもたちのものの見方・考え方を深め、豊かな想像力を育むうえで、読書の意義はますます大きくなっています。子どもたちの自主的、自発的な読書活動を充実させるためには、読書への関心を高め、親しませ、読書を日常化する工夫や方法が大切です。

「第四次『子供の読書活動の推進に関する基本的な計画』（文部科学省 平成30年4月）」では、読書習慣の形成には、発達段階の特徴を考慮しつつ一人ひとりの発達や読書経験に留意した取組が重要であることや、読書の関心度合いが低くなる時期において友人等からの働きかけを伴う子どもたち同士で本を紹介するような取組の充実が有効であるとしています。

そこで、県教育委員会では小学校期の読書習慣づくりに向け、「小学校期の読書習慣づくりの取組について」（令和元年9月）で、「楽しむ・ひろげる・つながる・深める」の4つのねらいによる取組（朝の連続小説、ビブリオバトル等）を提案するとともに、小中学校等及び高等学校でのビブリオバトルの普及活動を進めています。

県教育委員会提案の 取組例

● 発達段階に応じた読書活動の取組を ●

小学生

低学年

文字が読めるようになって、読み聞かせを続けたい時期です。一人で本を読もうとするようにもなり、文字で表された場面や情景をイメージできるようになってきます。物語絵本に加え、幼年童話や科学絵本との出会いも大切です。

中学年

子どもの関心がどんどん外へ向かい、読書の量と幅を広げる時期です。自分と比較して読めるようになってくるとともに、読む速度も上がってきます。少し長い話にも挑戦させたい時期ですので、絵本から読み物への移行の支援が必要です。

高学年

作品のテーマや著者や登場人物の生き方、考え方から、自身や社会について考えるようになります。読んだ本について人と交流することで読みを深めたり、読書の意義を実感したりできる取組が必要です。

中学生

自己の向上や社会への関心も高まり、徐々に大人の読書との差がなくなってくる時期です。勉強や部活動が忙しくなるこの時期は読書離れが進みやすいときです。同世代の友人等からの働きかけを伴う取組が有効です。

絵本から読み物への橋渡しに

朝の連続小説 ～耳からの物語体験～

担任の先生が子どもたちに長編の物語を毎日少しずつ読み語る読書活動です。読んでもらった本や同じ作者の作品を自分でも読もうとする子が出てきます。

本を通して人を知る 人を通して本を知る ビブリオバトル

発表者が読んで面白かった本を一人5分間で発表し、参加者との簡単な意見交換の後、参加者全員で「一番読みたくなった本」を選ぶ楽しい書評合戦です。

やってみようビブリオバトル



発表者（バトルー）が読んでおもしろいと思った本を持って集まります。



順番に一人5分間で本を紹介します。



それぞれの発表の後に参加者全員で、その発表に関する意見交換を2～3分程度行います。



全ての発表が終了した後に「どの本が一番読みたくなったか」を基準とした投票を参加者全員で行い、最多票を集めた本を「チャンプ本」とします。

読書活動推進の手段として有効だと思います。学校図書館での授業時に実施していますが、貸出や利用につながっています。

取り組んだ
教員の感想

限られた時間内で面白そうに本を紹介してもらったので、どの本も読んでみたくなりました。

観戦者として参加
した中学生の感想

- 県教育委員会では、ビブリオバトルを実際に行っている様子を撮影したDVD（小学校向け）（中学校向け）の貸出を行っています。
- 12月22日（日）13:30～ 三重県生涯学習センターで「高校生ビブリオバトル2019 三重決戦（県大会）」を開催します。ぜひ、お越しいただき、実際に見て、聴いて、投票してみてください。

学力向上 に向けた

具体的な実践事例

【事例36】紀北町立相賀小学校 どの子にも「学ぶ喜び・わかる喜び」を

相賀小学校では、平成30年度から算数科で「習熟度別少人数授業」を積極的に取り入れ、児童一人ひとりに応じたきめ細かい指導・支援を行っています。また、全国学力・学習状況調査で明らかになった自校の弱みを克服するために、全教職員が課題を共有し、チーム学校として、学力向上の取組を進めています。

成果につながる習熟度別少人数授業の取組

「わかる」「できる」授業づくりのための丁寧なコース選択

☆保護者への「習熟度別少人数授業」の説明

- ・4月の家庭訪問や「習熟度別少人数授業の案内」を通して、ねらいやコースの特徴、授業のよさを伝えます。

☆習熟度別コースの選択

- ・レディネステストの結果をもとに児童と個別面談を行い、児童の希望のコースを聞き取ります。
- ・テストの結果と希望コースの申し込み用紙を配布し、親子でコースを決めて提出します。
- ・学校長と情報を共有しながら、児童と個別面談、保護者と連絡を取り合いながら人数を調整し、コースを決定します。
- ・授業やテスト、面談等によって、単元でコースを変更することができます。

(各コースの指導内容及び担当)

●じっくりコース（基礎コース）：学級担任

- ・基礎的、基本的な学習を確認する時間を十分確保したり、具体物の操作や視覚支援を多く取り入れたりと、問題を確実に解けるように取り組みます。

●子どもの声●

- ・手を挙げたり意見を言ったりする回数が増えました。
- ・最初はコースに分かれて不安だったけど自信がもてるようになりました。

●保護者の声●

- ・自信がついてきたと教えてくれました。
- ・算数が楽しいと言っているののでうれしく思います。
- ・少人数で授業をしていただけるので、本当にありがたいです。

●担当教員の声●

既習内容の復習をしたり、じっくり課題と向き合ったりする時間を確保し、児童のペースで学習することを心がけています。「わかった！できた！」という経験を通して、「次、もっとやってみよう！」という意欲も高まっています。



●ぐんぐんコース（標準コース）：ベテラン非常勤講師

- ・自力解決の時間を十分確保し、発展問題に多く取り組みます。

●子どもの声●

- ・集中して勉強に取り組むことができてよかったです。
- ・難しい問題にもチャレンジできるようになりました。

●保護者の声●

- ・子どものノートを見るとノートのまとめ方がうまくなっています。
- ・本人は算数が得意になったと言っています。楽しんで勉強に取り組んでいるなあと感じています。

●担当教員の声●

考える時間をしっかり確保し、繰り返し書かせることで、算数用語を使い、筋道を立てて説明ができるようになってきました。コース分けによって、安心して学習ができ、伝え合い話し合う学習活動が活発に行われるようになっています。

相賀小スタンダードに沿った授業スタイル

- ・「めあて」の明確化と「振り返り」活動の習慣化。
- ・既習事項の定着と指導の充実（補助黒板の活用）。
- ・必然性のあるペア・グループ学習の設定。

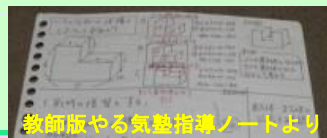
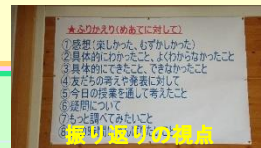
コースに応じた家庭学習用プリントの実施

- ・確実な学習内容の定着を図るため自作しています。

子どもたちの学習内容の理解と定着につなげる取組

- 全教職員による自校採点と分析、課題の共有化（チーム相賀小）
- 第1学年から第6学年の6クラスで、年間6回の授業研究を行う。…自校の経年的課題や弱みに焦点化（今年度は「倍」）
- 子ども一人ひとりの課題に応じた3点セットの着実な活用
- 朝学習や放課後の「やる気塾」（週2回）の実施
- 読書週間、朝読タイム、読み聞かせ等、読書活動の充実

- 家庭学習の習慣確立と自主学習を中心とした学習集団作り
- 若手の「授業力向上」をねらった「教師版やる気塾」の実施



紀北町立相賀小学校長からのコメント

「わかる授業」確かな実践事業における実践校に指定されて3年目になります。チーム学校として手探り状態で取組を進めてきましたが、子どもたちの学習の様子、保護者の声、習熟の度合い、どれをとっても効果が感じとれるようになってきました。

その中でも、4月に行われた全国学力・学習状況調査では、大きな飛躍を遂げ、大変うれしく思っています。習熟度別少人数授業をするにあたっては、2つのコースの担当教員等の連携が非常に大事で、習熟度のちがいによって授業の切り口や進め方の工夫を行う等、綿密に打ち合わせる必要があります。また、コースの組み替えにおいても、担当教員等が、子ども任せにするのではなく、習熟度や学習意欲等についてしっかり話し合い、子どもたちへアドバイスすることが大事となってきます。

この学習形態が子どもたちの学びに向上をもたらせ、どの子にも「学ぶ喜び・わかる喜び」を感じさせるものにしたと、日々みんなががんばっています。